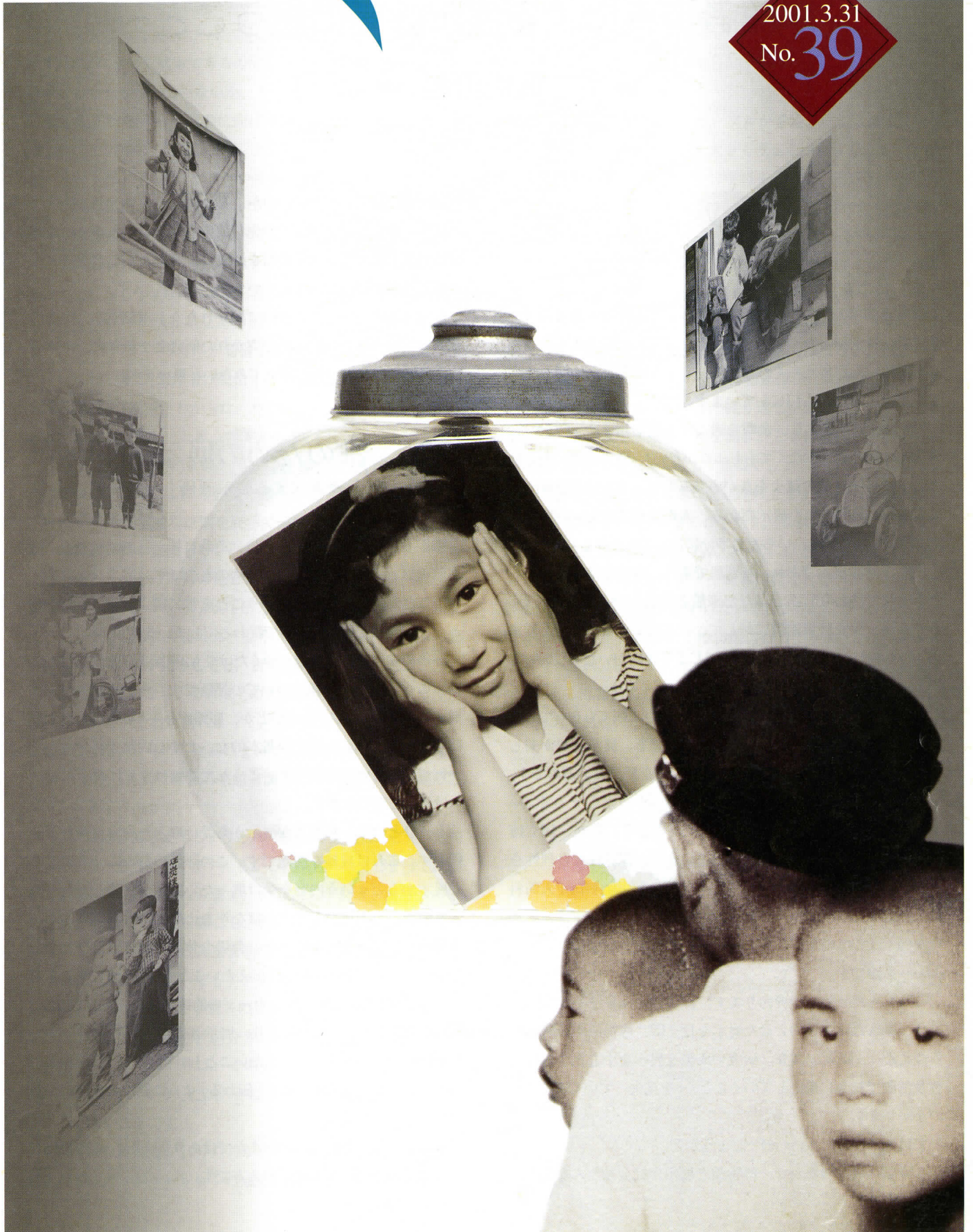


ふくいのミュージアム

2001.3.31

No. 39



特別展「ちょっと昔のくらしぶり」より(裏表紙参照)

あなたの声で展示が変わる

～来館者調査による展示評価に思うこと～

瓜生由起

はじめに

～展示の裏側から～

開館当初は人気を集めた博物館でも、その後の入館者数はジリ貧で、特別展もだんだんと入館者が減り、教室や講座を開いても新しい人が増えてくれない…。こんな嘆きをよく聞きますし、正直、自分でも口にしています。

「価値観が多様化し、余暇を過ごす場所も増えた」「だから、博物館に来る人が少なくてもしょうがない」、こんな風のため息まじりに来館者数の減少をながめてみたり、または「学術的な研究成果にもとづいた展示だから、人が少なくてもいい特別展だ」となぐさめ半分、いらだち半分に言ってみたりもします。

実際、常設展示であれ、特別展であれ、博物館は展示を作ったらそれで終わり。あとはただ来館者数に一喜一憂するだけ、というか、少ない来館者に対して、まるで「来なくてあたりまえ」的なあきらめをもって対処してしまう傾向がいなめないのです。…それでいいのでしょうか？

もちろん、それでは困ります。来てもらい、観てもらってこそこの展示です。展示を作る学芸員は、だれでも、展示会場が楽しそうに展示を観る人でいっぱいになることを夢見ているのです。

では、人がたくさん来ればそれでいいのか、東京ディズニーランドみたいに？そんな反論も聞こえてきます。現在、国立博物館の独立行政法人化に象徴されるように、採算性と合理性を重視した博物館運営が求められています。その場合に、「入館料収入＝入館者数」がそのまま「展示の評価」にスライドする考え方が強くなっていきがちです。この考え方をうのみにするのか、という反論です。

これにもたしかに一理あります。博物館が採算を心配するあまり、集客だけを目的とした展示を行えば、博物館が博物館たるゆえん——収集、調査、研究の成果を展示を中心とする教育普及活動で社会に還元していくこと——を見失っていくことにもつながります。

では、どうしたらいいのでしょうか？

こうした状況のなかで、博物館と展示が社会でどんなふう

受け入れられていくといいのか、真剣に考える学芸員が増えています。そして、アメリカの先行研究を参考にしながら、まずは博物館に来てくれた人たちを対象に、詳細な来館者調査による展示評価の試みが始まっています。

2000年3月に琵琶湖博物館で開かれたシンポジウム、同じく10月にブリジストン美術館で開かれた研究会を参考に、来館者による展示評価について考えてみたいと思います。

誰のための展示？

～「来館者調査による展示評価」のあらまし～

来館者調査による展示評価は、それ自体が目的ではなく、博物館の展示の改善につなげるためのものです。展示をよりよくすることが最終の目的だということを常に頭においておかないと、単に点数をつけるだけで終わってしまいます。

評価の内容は、いま思いつくだけでも2種類あります。ひとつは、ごく物理的な問題についての評価です。たとえば、キャプションやパネルの字が小さいとか、順路がわかりにくいとか、照明が暗い／まぶしいなどの基本的な、しかし内部からはなかなか気づきにくい問題点です。こうした評価はすぐに改善に結びつけることができます。

もうひとつは、来館者が展示から受け取った内容に関わる評価です。これは複雑な問題です。この評価のためには、来館者が展示からどのような内容を受け取ったら展示が成功したと判断するのか、を明確にしなければなりません。展示は博物館から来館者へのメッセージであり、会場全体についても、ひとつひとつのコーナーについても、「伝えたいこと」を明らかにする必要があります。メッセージの的確な発信と正確な受信、これが来館者調査の焦点であり、展示評価の基準です。そして、準備段階から来館者に「伝えたいこと」が「伝わる」かどうかを調べ、分析したうえで、より「伝わる」ように展示の改善につなげていくのです。

ここまでが、たいへんおおまかではありますが、来館者調査による展示評価の基本的な考え方です。

博物館が「伝えたいこと」

では、こうした考えに基づいた来館者調査と展示評価はそのまま、どのような展示についても、たとえば福井県立歴史博物館(仮)にもうまく適用できるのでしょうか?個人的には、そう簡単にはいかないのではないかと考えています。

展示を博物館から来館者に向けてのメッセージと考えること自体は、その通りだと思います。ただ、そのメッセージがこまかく設定され、そのひとつひとつを受信することを来館者に求めることには疑問が残るのです。つまり、博物館はたしかに「何か」を来館者に伝えたい、という想いで展示を企画し、組み上げます。しかし、その「何か」は来館者がその場で明らかに言葉で答えられるようなものとは限らないと思うのです。特に、私たちが現在計画中の福井県立博物館のリニューアルで試みようとしている、「モノ(=資料)が発信するさまざまな魅力を(博物館のアシストを得て)来館者が受信する」展示について考えたとき、来館者が得たものを「わかった/わからない」という形で調査し、評価することは難しいと思うのです。

さらに、博物館が意図する「何か」を展示の「正解」と来館者に印象づけすぎることにも不安を感じます。科学館や、自然史博物館が自然科学的な法則を展示で説明するような場合を除いて、博物館が展示意図として「メッセージ」を押しつけることは、来館者にとってそれ以外の見方、感じ方に対する抑制に働きはしないでしょうか。もちろん、「伝えたいこと」が伝わらない状況は改善しなければなりません。しかしその一方で、博物館の展示意図とは違っていても、資料を観た人が感じたこと、考えたことがあったなら、それはその人自身がモノと対話して得た体験です。モノとの対話によって、その人の博物館体験を豊かなものにしたい。そうしたあいまいで長期的なものを(大それたことに)目指していく場合の来館者調査については、一筋縄ではいかないと思うのです。

と、いうふうと考えてしまうと、「やっぱり無理なんじゃ」で終わってしまいそうになります。しかし、あきらめてしまつては最初の状態に戻ることにになります。自分たちが企画した展示の中で来館者がどんな時間を過ごし、何を受信し、それがその人の博物館に対する考えにどんな影響を与えたかについて、無関心でいたり、気にはしていてもアクションを起こせないままでは、よりよい展示(=資料と来館者のコミュニケーション)を実現することはできません。今回紹介された「まずメッセージありき」の来館者調査のノウハウは、そのまま導入するには難しいところがありますが、そうした試みがなされ、効果を上げていることは大変心強いことです。

それぞれの博物館が自分たちが目指す展示を見極め、展示と来館者のコミュニケーションの成立について、来館者を巻き込

んで考えていく、その中で、個々の博物館と来館者の双方によりよい博物館が出来上がっていくことと思います。

おわりに

～博物館は目指す～

平成15年春に当館のリニューアルが予定されています。いままでの展示とは構成や方針を大きく変えるつもりでいますから、この変化を来館者がどのように受け止めるか、今から少し心配しています。また、フレキシブル展示の計画のもと、毎年必ずどこかのコーナーが更新されていく予定です。そこで、リニューアルと展示変更を契機に来館者調査を行ったらどうか、と個人的には考えています。今までの博物館に対するイメージをもっている来館者に対して、リニューアル後の博物館がどうすれば上手にそのイメージを壊せるか、すぐに結論は出ないとは思いますが。何年かかけて、「うちの県の博物館はひと味違う」と思ってもらえるように、調査と改善の繰り返しが必要です。そうすることで、博物館が来館者の声を聞き、ともに進化する存在として身近に感じてもらうこともできるでしょう。

その過程でも、まだ大きな問題が残ります。そう、「博物館に来ない人にどうアピールするか」です。博物館に「今は」興味がない人たちを博物館に誘い込んでいくにはどうしたらいいのか、分野を超えてマーケティングや顧客開発などを学び、アイデアを出し合っていないといけないでしょう。

ふと時間が空いたとき、「博物館に行ってみようか」と思う人を増やしたい、そして、来てくれた人に「また来よう」と思ってもらえる博物館にしたい…そのためには、来館者のみなさんにもご協力をお願いすることになると思います。

(当館学芸員)

越前海岸の戦没者墓塔の観察から

坂本育男

越前海岸の北部、福井市鮎川には、国道沿いに20基近い石碑が立ち並ぶ一画がある。この石碑はすべて十五年戦争の戦没者の墓塔であるが、幅広でやや扁平な御影石の竿石は大きさ・形状にほとんど違いがないばかりか、基礎の積み方、竿石の仕上げ、書式までが共通したものになっている。なぜこのように、戦没者の墓塔は1か所に集められ、同じ形・書式で作られるのか。さらにはこれらは“墓”なのか？

民俗の記述では、戦没者やその墓については、近代の新しいものであるなどの理由により、ほとんど注意が払われてこなかった。しかし、そうであればかえって、伝統的な葬送の観念と国家意識が強調された時代の思潮をともし、さらに土地ごとの調和の図り方を見ることができらるだろう。こうした考えで、わたしは越前海岸の諸集落の戦没者墓塔のあり方を観察した。それらの特色を確認し、上にあげた疑問について考えたい。

戦没者墓塔の特色

1. 銘文の内容と書式：法名よりも官姓名を重視する点が、戦没者墓塔の最も顕著な特色である。戦没者の墓塔では多くの場合、正面に官・勲功と姓名が大きく書かれ、左右側面に法名、没年などがやや小さく彫ってある。ただし日清・日露戦争の段階では正面に法名と俗名を書くものなどがあり、標準的な書式が固定していなかったことがわかる。昭和に入るとおお

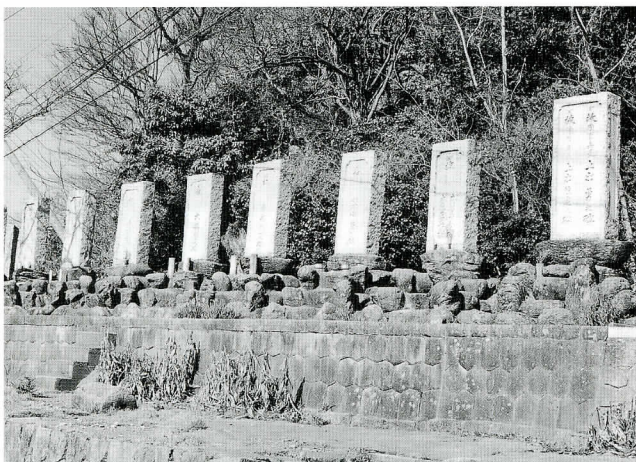


写真1 福井市鮎川の墓塔群

よそ固定したようだが、それでも軽微な揺れが見られ、さらに戦後の状況に合わせた書式も見られる。そうした中で、早い時期のものにはかなり長文の碑文をもつものがあること、比較的遅い建立のものに法名を全く記さないものがあること、高位の軍人などの染筆を記すことがあること、が注意される。

2. 形状：戦没者の墓塔にもさまざまな形がある。このうち、①竿石を四角錐の形にするもの、②福井市大丹生・鮎川に見られる自然石の一面だけをならして文字を刻むもの、③大型で扁平な形をもつもの、の存在がめだつ。④また軍の象徴である星印を陽刻するものも少なくなく、大きな基壇をもつものもある。いずれもその人が戦争にかかわって亡くなったことを、形の上でも示している。①は昭和になって普及したもののようなものである。また②③は日清戦争の段階から十五年戦争の段階まで作られているが、法名を欠いたり、「墓」とせず「碑」とするものが多い。

3. 同時の建立：戦没者の墓塔が集中している場所では、銘文の書式、基礎や装飾を含めた形状の全く同じものが並んでいることが少なくない。ある機会に、主導する人の呼びかけに応じて、同一の業者に依頼し、一斉に建立したためである。当然、記された建立年月も全く同じである。冒頭にあげた福井市鮎川では昭和18年8月にまず8基が作られ、その直後に建立の3基も先行する墓塔と同じ形にしている。また福井市白浜では紀年銘をもたない8基、昭和28年銘の12基がそれぞれ同時に作られている。ただこうした場合でも、該当遺族のすべてが関わったものではないらしい。このような一斉の建立は戦没者が多くなった昭和10年代以降に見られる。

4. 建立の位置と墓塔の集中：戦没者墓塔の建立位置は次の4つに整理できる。

- ①集落の墓地の個々の家の墓域内。
- ②集落または寺の墓地に建立されるが、個々の家の墓域から離れて入り口近くや高い段に集められる。
- ③墓地から離れた集落内または集落のはずれの道路沿いに個別に建てる。
- ④一般の墓地とは別の場所を選んで、集中して建てる。
 - ②は越前町高佐、福井市白浜で見られたが、福井市西部の農村でもいくつか例がある。④には次の例がある。

河野村 赤萩：集落の端、道路沿い。該当者のほぼすべてを集める。

河野村 糠：大正13年の関東艦遭難者慰霊碑が建てられた海岸段丘の先端に、十五年戦争の戦没者の墓塔が集まる。

福井市大丹生：国道沿いの山裾。明治の墓塔をここに移転し、その後少数の墓塔が作られた。

福井市 鮎川：前掲。ただし国道改修前には別の場所に明治の墓塔が立ち並ぶ一画があったという。

三国町 宿：神社に隣接した場所に忠霊塔を建て、これを囲むように十五年戦争の戦没者の墓塔が立ち並ぶ。

①は家とのつながりをより重視し、あるいは集団的な対応を配慮しない場合に現れる。これに対して②以下は家とのつながりよりも、戦没者としての顕彰または慰霊をより強く受けるべきだとの考えに基づくと言えるだろう。これは③の場合に明瞭である。②④では寺や集落が配分する家ごとの墓域が狭小で、実際に戦没者の墓塔を建立するスペースがとれないという事情や、同時の建立も影響すると思われる。また③④では集落のはずれが選ばれるように見受けられるが、どのような意識によるものか、まだ明確にできずにいる。

「碑」と「墓」の問題

戦没者の墓塔をめぐる問題は、すべて、戦没者は一般の人と違う特別な慰霊・祭祀を受けるべきだとの考えによる。それは入営・出征にまで払われた配慮からすれば当然の、地域をこえた時代の思潮だった。上であげた特色は、越前海岸に限らず、少なくとも嶺北では広い範囲に共通して見られる。そのうえでさらに、戦没者墓塔は墓なのか頌徳碑的なものなのかという疑問がのこる。

戦没者の墓塔では法名の記載が正面から脇へ下がり、全く記されないものも見られる。また正面の文字を「誰々之碑」とするものと「誰々之墓」とするものがある。福井市山室町の「N君碑」は基壇付き、竿石が直方体、明治39年の建立銘をもつものであるが、単独でやや大きな敷地をもち道路に向いている。竿石に長文の碑文があり、基礎には建立発起人と賛同者の名前が

彫られている。また河野村糠の「Y之碑」は塔身だけで高さ3.5m、幅1mという大型のもので、集落の中の道路沿いに、ほぼ同じ大きさの酒造功労者の碑2基と並んで立つ。これらは建立者にも「墓」の意識はなかったのではないか。ところが鮎川では冒頭の墓塔が「碑」と記されているにもかかわらず、遺族会の会長をされている人も“墓”と考えていた。十五年戦争の戦没者墓塔では「碑」と「墓」の違いがあまり意識されていなかったのではないかとさえ思わせるほど混在している。しかし日露戦争の段階では、「碑」とする場合、従来の墓と性格の異なるものであることを強く意識していたのではないだろうか。

戦没者を慰霊するものでも、忠魂碑は墓と意識されない。それでも慰霊祭のときは拝礼し、供物をあげるから、そのときだけは依代よりしろになることになる。一方、墓石は一般に霊の依代とされ、死者(先祖)を祀り、その記憶をとどめるためのものである。そうなると、頌徳碑や慰霊碑と墓石の違いは遺体につながるものの有無にある、となるかもしれない。あるいは「墓」が身内や限られた人だけの記憶を呼び起こそうとするのに対して、「碑」はより多くの人に記憶や賞賛を求めるものとも言えよう。忠魂碑と戦没者墓塔では、前者が多数の人を記念するために村や集落が建立し、後者は個人を顕彰するために親族が建てた点が違う、とさえ言える。そうであるなら、ごく若くして亡くなった無念さを慰撫する必要から、普通の墓石と違う特殊なものが造られたと言えるかもしれないが、まだ推測の域を出ていない。

(当館主任学芸員)



写真2 福井市大丹生の墓塔群

瀧谷寺と福井城の越前瓦

中原義史

博物館では現在、越前瓦の調査を進めています。「越前瓦」とは、鉄分をふくむ釉薬を塗って焼いた瓦のうち、とくに越前で生産されたものを指します。江戸時代から現在まで生産されていますが、古い時期のものは、ふき替えの時に廃棄されることが多く、あまり残っていません。

昨年の秋、調査に訪れた瀧谷寺(三国町瀧谷)で、みなれない越前瓦を発見しました。

まず目を引いたのは、その色でした。越前瓦の釉薬の色は、時代とともに変化します。江戸時代後期のものは赤紫色をしています。明治時代になると次第に黒っぽくなってゆき、現在のものは銀色をしています。しかし、瀧谷寺の瓦はこのどれとも異なり、茶褐色をしていました。これまでの寺社や民家の調査で、このような色の瓦に出会ったことはありませんでした。そこで、同じような色の瓦を探してみると、福井城跡でみつかる江戸時代前期の瓦が茶褐色をしていることがわかりました。

もう一つ特徴的だったのは、釉薬が瓦の表側にだけかかっていたことでした。裏側やふいたときに他の瓦の下に隠れる付け根の部分は、瓦の生地が露出していました。これも福井城の古い瓦と共通する点です。19世紀になると、瓦の裏側にも釉薬がかかるようになります。

さらに、瀧谷寺の瓦の三つめの特徴は、これが「軒平瓦」という瓦であったことです。軒平瓦とは、平瓦のうち、軒先部分に使われるものを指します。平瓦は丸瓦という瓦と組み合わせで屋根にふきました。このようなふき方を「本瓦ぶき」といいます。古代から江戸時代前期までの瓦は、すべて本瓦ぶき用のもの

ので、福井城の江戸時代前期の瓦もそうでした。しかし、江戸時代には、丸瓦と平瓦の機能を一枚でこなす「棧瓦」という新しいタイプの瓦も現れ、越前でも江戸時代後期の瓦は、ほとんどがこのタイプになりました。

このようにみえてくると、瀧谷寺のこの瓦は江戸時代前期のものと考えてよさそうです。瓦自体からは、これ以上細かい年代はわかりませんが、ほかに年代の決め手になる資料はないのでしょうか。

瀧谷寺の観音堂は寛文3年(1663)に屋根の大修理を行ったことが、建物の墨書からわかります。そして、この時にかやぶきであった屋根を瓦ぶきにしたと伝えています。いっぽう、隣に建つ本堂は、棟札から貞享5年(1688)に改建されたことがわかりますが、当初わらぶきだった屋根を瓦ぶきに改めたのは、天明7年(1787)のことと伝えています。さらに、庫裡など他の建物は、すべて江戸時代後期以降に建てられたものでした。

このことから、江戸時代前期に瓦をふいていた建物は、観音堂だけであったことがわかります。今回発見した瓦は、寛文3年に観音堂にふかれたものだったのです。

17世紀の越前では、瓦はほぼ城郭に限って使われ、寺院や神社も、ほとんどは木の板や皮をふいたものでした。これには、瓦の生産量が少なく価格が高いということだけではなく、城郭以外での瓦の使用がはばかられていたことも考えられます。江戸では、このころ町家や寺社などの瓦ぶきに対して禁令が出されていました。ぜいたくを戒めるという理由のほかに、武家が独占している瓦ぶきが町人の家屋に広まると、建物の格式を示すという瓦の機能が失われるということも、大きな理由であったと思われる。

このような当時の状況のなかで、瀧谷寺はなぜ瓦をふくようになったのでしょうか。瀧谷寺は、福井藩主の祈願所として初代秀康など6代の藩主の位牌をまつていました。また、正月には住職が福井へ出向き、藩主へ年頭のあいさつを行っていました。このように、瀧谷寺は福井藩主と深い関係にあり、そのため特別に瓦をふくことが許されたのではないのでしょうか。



写真1 瀧谷寺の越前瓦(裏側)

このような瀧谷寺と福井藩主の関係をうかがわせるものに、瓦の文様があります。今回発見した瓦は、軒先部分に使われる軒平瓦で、先端部に文様がついていました。中央にギザギザの花弁のような文様があって、その左右に唐草のような文様があります。これは、福井城で使われていた江戸時代前期の瓦とよく似ています。おそらく、同じ瓦屋が瀧谷寺と福井城の瓦を作ったためであると思います。

では、どちらの瓦が先に作られたのか、文様を比較して考えてみましょう。

博物館では、福井城の内堀で採集した瓦を所蔵しています。おそらく、本丸の門にふいていたものと思われます。越前瓦と釉薬をかけないいぶし瓦の2種類がありますが、瀧谷寺と同じような文様をもつものは、すべて越前瓦です。これらの文様は、いっけん同じようにみえますが、細かくみていくと花卉や唐草の違いから3つに分けることができます(図1の①~③)。このような文様の微妙な違いは、年代差を反映しているものと考えられます。原型となる文様からコピーを重ねるにつれて、しだいに原型から離れた文様が生み出されてきたのでしょうか。

この3つの文様は、唐草の形の違いから①・②のグループと③の大きく2つに分けられます。このうち前者のほうが唐草の表現がより写実的で、古いものと考えられます。①と②のどちらが古いかということについては、今のところ判断ができません。瀧谷寺の瓦の文様(図1の④)は、福井城の③に似ていますが、まったく同じではありません。③では4本ある花卉の中の線状の部分が、④では省略されて2本になっていて、③よりもさらに新しいものと思われます。

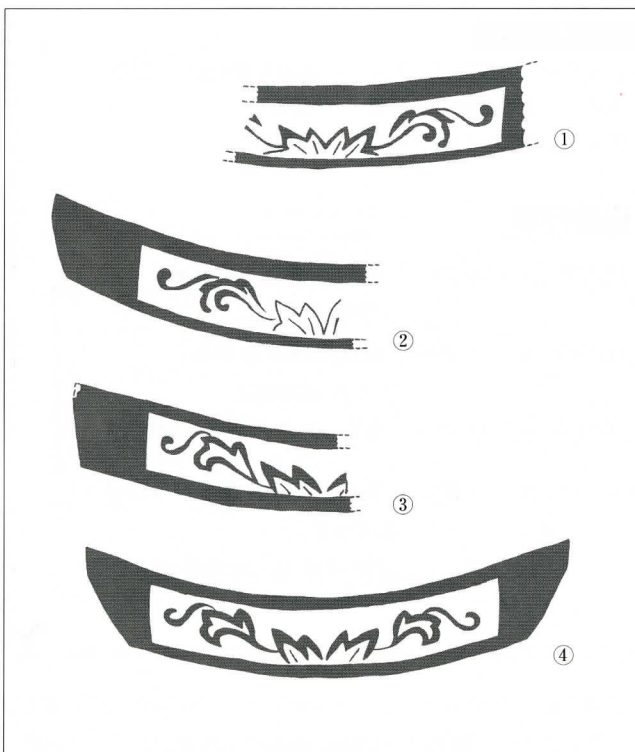


図1 福井城と瀧谷寺の越前瓦(軒平瓦)の文様
①~③:福井城跡 ④:瀧谷寺(縮尺1/4)

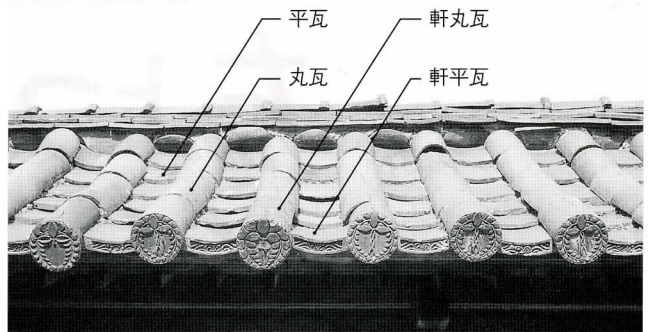


写真2 本瓦ぶきの屋根(鯖江市誠照寺)

このことから、福井城でみつかると①~③の瓦は、寛文3年以前のものである可能性が高くなりました。福井城の瓦は、これまで年代の決め手となるものが少なかったため、この瀧谷寺の瓦の発見は非常に重要です。

瀧谷寺には、「享和元年」(1801)の銘文のある鬼瓦や、このころのものと思われる棧瓦が残っていて、この時期に観音堂が本瓦ぶきから棧瓦ぶきに、ふきかえられたと考えられます。

京都や奈良などの大寺院では、棧瓦が普及する江戸時代後期以降も、本瓦を使い続けている例が多くあります。また、本堂のように信仰の中心となる建物が本瓦ぶきで、庫裡のような生活の場となる建物が棧瓦ぶきというような使い分けがなされる場合もみられます。このことから、本瓦のほうが棧瓦に比べて格が高いという意識が広くあったようです。「本瓦」という名称自体、そういった意識を反映しています。

では、瀧谷寺の観音堂の屋根は、なぜ本瓦からより格下の印象をあたえる棧瓦へと、ふきかえられたのでしょうか。

理由の一つに、軽量化をめざしたことが考えられます。本瓦ぶきを棧瓦ぶきにすると、瓦の総重量を五割軽減することができるといわれます。雪の多い北陸では、屋根の重量を軽くすることが、雪の重みから建物を守るために必要とされたのではないのでしょうか。実際に、北陸地方では本瓦ぶきの建物は城郭をのぞいて、非常にまれです。

しかし、それだけが理由なのでしょう。本瓦ぶきの屋根を維持管理する費用がかさんだということも考えられますし、時とともに本瓦ぶきが許されなくなってきたということもあります。いろいろな要因が考えられ、ここで簡単に結論をだすことはできません。課題として、今後考えていく必要があります。

(当館学芸員)

■参考文献

土屋久雄:『瀧谷寺の文書と寺宝』瀧谷寺、1984

杉本 宏:「棧瓦考」(『考古学研究』第46巻第4号、考古学研究会)、2000

ちょっと昔の くらしぶり



ちょっと昔、今から数十年ほど前のくらし。
それは、急速な時代の流れのなかで、すでに遠い過去になりつつある世界。
21世紀を迎えた今、ほんの少し足を止めて、あの頃を振り返ってみたい…。
そんな思いをかき立てる、じつに懐かしいモノたちが大集合しました。
その時代の体験者が、子や孫たちの世代に語り伝える展覧会です。
郷愁をいっぱい詰め込んだ会場で、
ぜひ懐かしいひとときをお過ごしください。

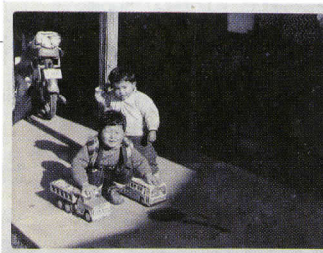
なつかしい風景

なつかしい町の景観や人びとのくらしを写し取った、絵はがきや地図、記録フィルム、スナップ写真を紹介します。

おもな展示資料 絵はがき・地図・記録フィルム・生活スナップ写真

●映像でみる戦後のふくい

「明けゆく福井」「県政ニュース」(昭和30年代)



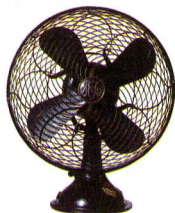
ちょっと昔の生活用品

くらしのなかの身のまわりの品々。とくに冷蔵庫や洗濯機・テレビなどの戦後に普及した家電製品を中心に紹介します。

おもな展示資料 マンガ雑誌・ランプ・蓄音機・家電製品・自動車・自転車・スクーター・おもちゃなど

●特設 復元「駄菓子屋さん」

(昭和30～40年代の駄菓子屋の店先を再現します)



戦災・震災・復興

福井空襲と福井地震、復興記念祭を撮影した写真(最新収集品)を紹介します。

●おもな展示資料

もと米国軍人の写真コレクション(福井空襲・復興記念祭)
米国国立公文書館所蔵の写真(福井震災)
米国軍人が撮影したカラー写真(福井震災)

「織物王国」

ふくいの近代～現代の基幹産業であった絹・人絹織物業関係の資料をならべます。

おもな展示資料 織機・整経機・工場備品 など

体験コーナー「昔の子どもの遊び」

ちょっと昔の子どもたちが夢中になった遊びを体験してみませんか。(ビー玉・メンコ・おはじきほか)

関連行事

5月12日 [土] 14:00～ 「近代織物業のあゆみ」

学芸員 笠松雅弘

5月19日 [土] 14:00～ 「近代広告のあゆみ」

学芸員 山形裕之

5月26日 [土] 13:30～ 「ちょっと昔の子どもの遊び」

6月9日 [土] 14:00～ 「ちゃぶだいのある暮らしをめぐってⅡ」

館長 平井 聖・学芸員 坂本育男